

小型ハウスを用いたカキ台木育苗方法

～ 小規模でもできる幼苗接ぎ木用台木生産 ～

簡易な小型ハウスで2月上旬から電気式温風機を用いて加温を行うことで、6～7月にカキの幼苗接ぎ木を実施できる台木苗が育苗できました。またその際、カキが栽培されている大型のハウスで育苗した場合と比べて、生産コストは苗1本あたり11%程度削減できます。

1. 背景と目的

カキの苗木生産は台木の育成から苗木の出荷までに約2年がかかります。奈良県では以前に、苗木養成期間の短縮と、台木をポット育苗することで定植後の生育不良を軽減することを目的としたカキ当年生台木を用いた幼苗接ぎ木法を開発しました。この方法では苗を一年間ポットで養生し、大苗にすると植えた年から果実の収穫が期待できます。

しかし、幼苗接ぎ木法で用いられる当年生台木の生産には加温設備のあるビニルハウスが必要のため、初期投資が課題でした。今回、比較的導入のしやすい小型ハウス(図1)と電気式加温装置(ソーワ SF-1008A)を用いて幼苗接ぎ木で使用できる台木の育苗方法を検討したので報告します。

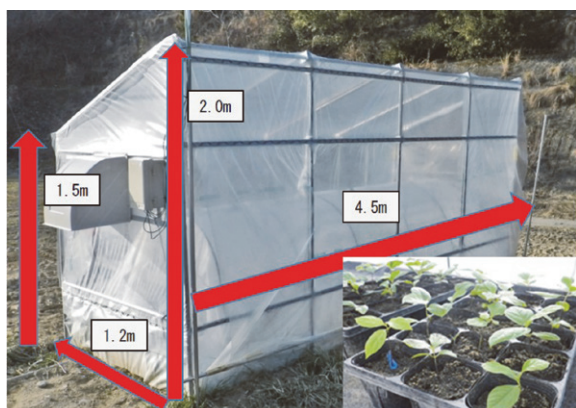


図1 小型ハウスの外観および苗生産の様子

2. 研究成果の概要

小型ハウスの内部にトンネルを設置し、その中で2月上旬に台木用のカキの種子をセルトレイに播き、最低気温20℃設定で電気式加温装置を用いて加温を行いました。小型ハウスでは大型ハウスと比べて、最低気温、最高気温とも

に高く推移し、苗の茎径は太くなりました(図2)。さらに、苗木1本あたり11%程度のコスト削減が図られました(図3)。

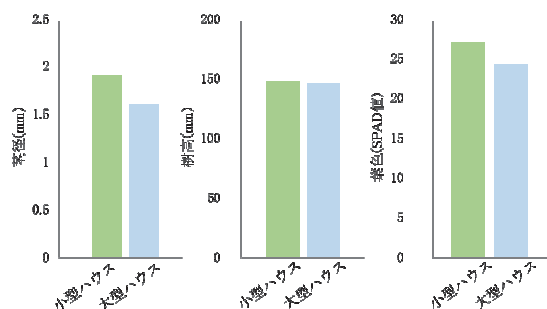


図2 当年生台木苗の生育比較

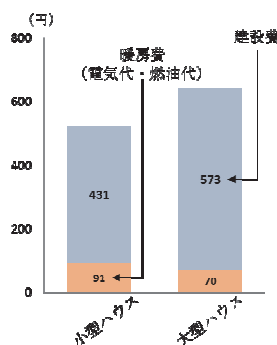


図3 苗1本あたり生産コスト

小型ハウスは4号ポットを1棟あたり225ポット、大型ハウスはハウス柿生産ハウス中で10aあたり10,900ポットを並べた場合で試算

3. 実用化に向けた対応

本成果から、小型ハウスを用いることで個人でもカキ当年生台木を用いた幼苗接ぎ木法に取組みやすい環境が整えられました。今後老木園の改植や有望な新品種が登場した際の品種転換等に活用し早期成園化を図っていきます。

※本研究の一部は「農林水産省食料生産地域再生のための先端技術展開事業『持続的な果樹経営を可能とする生産技術実証研究』」により実施しました。

(果樹栽培ユニット 上田 直也)